

エリート淘汰の仕組みと 英語ディベート拡大という 2つの活動が刺激し合う

Navigator

文学部 / 社会学専攻

矢野 善郎 教授

Yoshiro Yano

矢野 善郎 (やの よしろう)

1968年6月19日神戸市生まれ、東京で育つ。1991年、東京大学文学部(社会学)卒業。1996年、同大学大学院人文社会系研究科博士課程満期退学。社会学博士号を取得した後、東京大学助手などを経て2014年、中央大学文学部教授。

エリートが選ばれていく
メカニズムを追求する

マックス・ヴェーバーという人物を皆さんは知っているだろうか？社会学のレックスナーで登場して来るような社会学の第一人者だ。矢野先生は、大学時代に日本の社会学の3人の大家に教えるを受けるチャンスに恵まれ、先生が考えたかった問題をヴェーバーの研究に見つけた。ヴェーバーの学説には「宗教」が重要な役割を果たしているのだが、実はその内容は、皆さんがこれから歩む生き方とも重なるのだ。

「ヴェーバーは、自らが遺した宗教社会学に関わる書籍のなかで、宗教そのものを問いたかったのではなく、宗教などを利用して社会がどんな人間をエリートとして選んでいくかというメカニズムを見たかったのではないか、というのが私の視点です。そこから私は、『淘汰』(選抜・生き残り)のメカニズムについて理論的に考えるようになりました。淘汰という言葉は、生物学の分野でよく使われますがヴェーバー自身も使っているのです」

社会で指導的な役割を担うエリートと呼ばれる層が、どんな仕組みを通して選ばれるかを追求する。それは先生独自の視点だ。

「それを、ギリシャ語で『競技』を意味する『アゴン』から『アゴノジー』と名付けました。社会のなかでエリートが選ばれる過程で、

どのような宗教、生活の態度、知識が影響しているかを説明するモデルとして考えています」

そこで先生に、中国とアメリカという異なる2つの社会を題材に分かりやすく説明してもらった。

「伝統的な中国では『儒教』(紀元前の中国に生まれた思想)の考え方が試験で問われるのですが、この思想はエリートに『社会をぐいぐい引っ張っていく』のではなく『現在の秩序を変えない』バランス感覚をむしろ求めています。したがって、社会変革を行う人物は儒教の原理から反論を受けたりします。そのようにエリートにとつての儒教は心の支えになり、自らの利益を守るために改革者をつぶそうと試みたりもするのです」

プロテスタントの論理が
アメリカンドリームを
考える

儒教に影響された伝統中国のエリート(の生き方の対極にある宗教観に根差したのがアメリカ社会だ。

「17世紀以降に力をもった『プロテスタント』(宗教改革で生まれた新教)の考え方に支えられているのがアメリカ社会です。いわば『やめることをしてはいけない。自分の人生を変えていかないといけない』という思想で、会社を一つ成功させたら二つ目にチャレンジするような人間を生むアメリカ社会の精神的な土壌についてヴェーバーは語っています。『自分分は努力して這いあがっていく。そういう人間を神さまは選んでくれ

る』という『選民思想』の考え方も、現在のアメリカ社会に残っています。これに対して、同じキリスト教徒でもカトリックだったら『職人は職人として生きなければならない。二つ目の会社など持つてはいけない』という立場ですから、アメリカンドリームも、プロテスタントの精神が根本に存在しなかったら成立していません」

それでは「アゴノロジー」で日本社会のエリートを分析するとどうなるのだろうか。先生に訊ねた。

「日本社会は、誰かが救ってくれると導く『大乘仏教』と儒教の一部が結びついた行動原理を生んできました。これは、武士が役人化し『論語』(儒教の四書の一つ)を読み始めた江戸期以降、日本に定着したと解釈しています。いわば『バランスをもった君主になれ。突出した発言はいけない』という考え方ですね。したがって、エリートといっても組織のなかで生きていくような人材に結びついている気がします」

矢野先生は、こうした淘汰つまりアゴノロジーの考え方を、現代社会を把握する理論として位置付け、研究を重ねている。



M・ヴェーバー研究に新たな視点で臨んだ矢野先生の共著。

**社会問題を見つけ広げるために
ディベートの有効性を伝える**

矢野先生がアゴノロジーを通して
大学入試をみると、どうなるか。そ
こには、先生のもう一つの研究活動
の柱がみえる。

「ペーパーテストに重きを置いた日
本の試験がいいのか、リーダーシッ
プについても問うアメリカの入試制
度を取るのか。いずれにしても大学
入試は、どんなタイプのエリートを
育てるのかをじっくりと検討したう
えで、考えるべきです」

そのなかで、高校時代にどんな議論
をしてきたかという、いわゆるディ
ベートについて試験で問うのも一つ
の選択肢だと先生は語る。

「ディベート教育は、私たちが、当
たり前」として鵜呑みにしていた考
え方や概念に疑問を投げかけ、社会
について考える手助けになる。そん
な意識でディベートの推進を手伝っ
ています。冷静に事実や概念を用い
て討論できる人間を育てることが、
社会問題に気づいて話し合い、意志
決定していく際に役立つのではと思
っています」



矢野先生が力を注ぐ全国高校生英語
ディベート大会の“激戦”の解説書だ。

その先生が最大の成果と語るのは、
日本各地の高校教師たちと拡大して
きた「全国高校生英語ディベート大
会」だ。

「2006年の発足時は17都道府
県で40校ほどが活動する程度だった
のですが、現在では40都道府県で約
300校が活動しています。これは
社会的にみても驚くほど急速に展
開した社会運動であり、当事者とし
ても勉強になり誇りでもあります」

先生は「各自が整理して、ちゃん
と話す習慣をつけられれば、世の中に問
題が伝わりやすくなる」と、ディベ
ート教育の浸透に期待を寄せる。

**互いに磨き合うなかで
自分ではできるという自信を培う**

このようなディベート重視の姿勢
は、当然のことながら矢野先生のゼ
ミにも活かされている。

「『ディベート合宿』というのを伝
統にしています。エネルギー政策や
移民政策、福祉政策などの社会的な
テーマをゼミ生自身が決め、3、4
人の班別に合宿中に一人4回各1時
間、真剣に議論します。見ている方
の班は『全然調べてないじゃないか』
などダメ出しをするのですが、指摘
を受けた班は次のディベートまでの
5、6時間に立て直しを図ります。
夜にダメ出しされた班は、悔しいか
ら徹夜で直したりもするので、最後
にはかなり良いディベートになりま
すが、過酷な合宿です」
このように互いを磨き合うなかで

先生は、学生時代に身につけてほし
い事柄として次の言葉を送る。

「自分は時間をかけて勉強すれば何
事もそれなりに理解でき、正しく判
断できるという『将来の自分への信
頼』。高校・大学時代に様々なこと
を学び、いろいろな人と討論して共
に行動することで、将来の自分への
信頼を積み上げてほしいです」

矢野先生のもとでなら、そんなう
れしい自信を培うことができそうだ。
最後に、社会学者としての先生にと
つての目標について訊いた。

「日本社会で進行する格差を生み出
すメカニズムを私なりの視点で考え
たいです。そのなかで日本社会のエ
リート選抜のメカニズムがどう変化
していくのか、変化すべきなのかに
ついて見ていきたいです。

東アジアでは、韓国・台湾・中国
も日本と同じくペーパーテストの大
学入試が主流という面白い共通点が
あります。そして人材を淘汰する
社会や、ディベート能力などを競っ
て淘汰する社会、あるいは全く別の
原理で人材を淘汰していく社会を比
較し、それぞれの行く末を研究する
ことが長期的課題です。例えばディ
ベート教育を淘汰の原理に据えると、
親の世代の意識の差が格差を広げる
可能性も考えられ、注意深く進める
必要があります」

よりよい社会づくりを目指す新た
なエリート淘汰の仕組みを究める矢
野先生。皆さんは、その主人公とし
て参加する価値が大いにある。



“Close up,”

現在の研究テーマを教えてください

- ・マックス・ヴェーバーが宗教社会学の中で用いている「淘汰」のメカニズム。
- ・日本社会ととりわけ高校教育などへのディベート・討論教育の普及と研究。

ご趣味は？

大学時代から米英のミステリーやSF小説を原著で読み続けている。在外研究期間中にはNBA(米国プロバスケットボール)の虜になる。

どんな高校生でしたか？

高二まではESS(英会話)部で熱心に活動しました。そこで偶然出会った英語ディベートと30年間関わることとなります。高三からは

最低限の受験勉強で、とりあえず大学入学という近視眼的な課題に取り組みました。

高校生の頃の夢は？

当時は反抗期で、父親のようなサラリーマンにはなれないなどは思っていました。将来をまじめに考えていた記憶がありません。

お薦めの本を3冊あげてください

1. 『ダーウィン以来—進化論への招待』
スティーヴン・ジェイ・グールド(ハヤカワ文庫)
2. 『銃・病原菌・鉄—1万3000年にわたる人類史の謎』
ジャレド・ダイヤモンド(草思社文庫)
ヒトという生き物について現代の自然科学から考えさせてくれるだけでなく、歴史的な素養に裏打ちされた著作です。
3. 『職業としての学問』
マックス・ヴェーバー(岩波文庫)
難しい本ですが、科学って何だろうかと考えさせてくれ、読み返すたびに色々と悩みます。

先生にとっての“特別な一冊、は？

『宗教社会学論集』
マックス・ヴェーバー(みすず書房)。

「西洋／東洋」の問題を考えるうえで、現代でも最も重要な著作の一つです。

高校生へメッセージ

大学はゴールではないので、高校時代は、受験技術だけでなく進学後につながる真の「知」の技術を身につけてほしい。私は、全国の高校生たちに英語ディベートを広げる手助けをしています。参加してませんか！



英語ディベートは勝ち抜き戦ではなく、実力を上げるため予選を5試合行う。

20世紀初頭に活躍した社会学の巨人、M・ヴェーバーの業績は奥が深い。